

教員養成課程における学生の ICT を活用した授業への意識についての一考察

－「中等家庭科教育法」における調査を通して－

A Study on Students' Attitude toward ICT-based Teaching in Teacher Training Programs
－ Through a Questionnaire Survey in “Secondary Home Economics Education Method” －

岸田 蘭子
Ranko KISHIDA
滋賀大学大学院教育学研究科

與倉 弘子
Hiroko YOKURA
滋賀大学教育学部

田中 宏子
Hiroko TANAKA
滋賀大学教育学部

平松紀代子
Kiyoko HIRAMATSU
滋賀大学教育学部

久保 加織
Kaori Mukai KUBO
滋賀大学教育学部

<キーワード> 教員養成課程 中等家庭科教育法 ICT 活用 授業への意識

1. はじめに

学校教育現場においては、文部科学省の GIGA スクール構想はもとより、COVID19 の影響もあり教室での学習様式は一変したともいえる。ICT の活用については、どの教科の指導においても効果的に取り入れた授業実践はなされてきており、指導にあたる教員も一定の活用スキルを身に付けてきている。例えば全国学力学習状況調査の学校質問紙調査や児童質問紙調査の経年変化をみても徐々に授業の中に取り入れられてきている¹。

教育現場においては一人一台タブレット端末が配布されたことで、ICT を活用した授業展開が今や主流といっても過言ではない。現職教員にあっても校内外での研修を通して、そのスキルを磨き、授業改善は必須のこととなってきている。教員養成課程において、学校現場の授業の参観や教育実習に行く学生のとまどいや不安は大きいにちがいない。

「教員養成課程における ICT 活用指導力の育成のための調査研究（国立教育政策研究所）」によると、「教員養成系大学における ICT 環境や機器の整備の中でも実物投影機やプロジェクタに比べて、電子黒板やデジタル教科書による指導を学べる環境づくり、教職課程の講義が利用できるネットワーク環境の整備が整っていると言いがたい²」という指摘がなされている。

本学においても環境整備がすすめられ、学生が授業で使えるタブレット端末も整備されてきている。学内ネットワークのセキュリティの確保や無線 LAN の整備についても同様に進められてきている。

講義における ICT 活用の程度については、「資料の提示」にとどまっていることが多く、「学生の考え方を共有」させたり、「グループワークなどの協働学習をさせたり

する活用は低い」³ことが報告されている。特に、技術・家庭科（技術分野）や情報科以外の教科の指導法において高くない結果も報告されている。

このことから、学生が教員になった際に、ICT の活用を意識した授業を実施できるかどうかについて、大学での授業やカリキュラムの検討が必要といえる。報告書では、これら情報活用のスキルや情報リテラシーやモラルに関する授業を必修科目として位置づける方向が提言されている⁴。その結果、文部科学省は教職課程に必修科目として「情報通信技術を活用した教育の理論と方法」を設けることとなった。

しかし、実際に教育現場に出てみると日々教師に求められる授業づくりは各教科の学習内容をこれまでの指導法に基づいて繰り返すことで精いっぱい新しい要素を取り入れたり自ら生み出そうとしたりするにはかなりの経験とエネルギーを必要とする。ましてや初任者にとってはいかに大学で学んできたことが通用するかを試される毎日である。それを克服するためには教員になる準備段階で最新の教科教育の情報のもと最新の指導法での事例に学んだり、最新の指導法に基づいた教科教育法を身に付けたりしておくことが重要である。その第1歩として、今回は、学校現場で現在行われている ICT を活用した授業に出会わせることによって、学生がどのように感じるのか、どのようなことに不安感があり、どのように意欲をもっているのかについて意識調査を行うこととした。

2. 研究計画と内容

2.1 調査対象科目

滋賀大学 教育学部教職科目

中等家庭科教育Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（特別講義）

本科目の第 15 回講義のオプションとして、小学校家庭科教育を専門として授業研究の経験をもつ教職大学院教員（筆者）が ICT を活用した授業実践事例をもとに特別講義を行った。

講義内容：

「明日を生きる子どもたちが家庭科で何を学ぶのか」

—今日の課題・新しい学習様式への提案—

使用教材：

「買い物について考えよう—エコバッグがほしい」⁵

「京町家 VR コンテンツ」⁶

使用学習アプリケーション：ロイロノート 2022 版

2.2 調査時期及び方法

2023 年 2 月 1 日

Microsoft Forms を用いた質問紙調査

2.3 調査対象者（受講対象者）

本学教育学部学校教育教員養成課程初等教育コース初等教科専攻家庭専修及び中・高等学校家庭科免許取得希望の学生

2 回生 8 名、3 回生 10 名、4 回生 11 名、教職大学院院授業力実践力開発コース生 1 回生 3 名 計 32 名

2.4 アンケート調査の項目内容と趣旨

当日、講義直後に実施したアンケートの調査項目の構成は以下の通りである。

まず、学生にどれだけの教科内容にかかわるデジタルコンテンツについての知識や学習経験があるのか、また今回受講したデジタルコンテンツや学習アプリを使った授業について、率直に学習者はどのような感想を持ったのか、そして、今後教壇に立つことを考えて指導者として家庭科の授業においてデジタルコンテンツや学習アプリを使った授業展開を「積極的に取り入れてみたい」あるいは「積極的に取り入れたいとは思っていない」、「なぜそう思うのか」を問うことで意識を明らかにできるのではないかと考えた。他に、今後に向けて ICT を活用した授業についての質問や感想を自由記述で回答させた。

2.5 アンケート結果の分析と評価の活用

アンケートの結果は、まず家政教育講座の教員と共有

し、今後の教科教育法の課題と展望について協議する材料とした。また、学生にも結果を開示し、今後の教育実習や教育現場での ICT を活用した授業実践について意識をもって取り組む課題の方向性を示す契機とした。

3. 結果と考察

3.1 家庭科学習におけるデジタルコンテンツや学習アプリケーションについての知識や学習経験

アンケート調査の結果は表 1 の通りである。これまでに家庭科にデジタルコンテンツ教材があることを知っている学生が多数いることがわかった。なかでも 2 回生は全員知っていたが、3 回生 80%，4 回生 73%，M1 67%と学年が上がるごとに低下していた。大学の講義との関連や個人の学習履歴との関連については質問はしていないが大学入学以前に ICT 機器が導入された授業を受けてきた経験が反映されている可能性が考えられる。また見たことはあるが使ったことがない学生が多く、使ったことがあるという回答には学年間の傾向がさらに強く認められた。教育実習を履修済みの 3 回生に見たことも使ったこともない者がいることもわかった。家庭科にデジタルコンテンツも使ったこともない学生が 18.7%，見たことも使ったこともない学生が 28.1% もいることも注視しておく必要がある。3・4 回生については本調査後 8 ヶ月後の卒業あるいは 4 回生となった段階で卒業後の進路がほぼ決定していた。そこで進路ごとに調査結果を集計したところ、中高教員に進むものは全員家庭科にデジタルコンテンツがあることを知っており、使ったことも見たこともない者はわずかであった。一方、幼保あるいは小学校教員に進むものは半数以上があることを知らず、使ったことがあると回答した者はいなかった。初等内容学や初等教育法は大人数の授業であるためにデジタルコンテンツや学習アプリケーションを実際に体験する機会をつくりにくいことが考えられる。このことから、大学の授業での工夫が求められる。とくに学習アプリケーションについては、知っているが使ったことがない学生が多く、大学の授業の中で実際に使ってみる機会や経験が必要であると考えられる。

表 1 家庭科におけるデジタルコンテンツや学習アプリケーションについての知識や学修経験に関する質問と回答

設問	回答結果				
これまでに家庭科にデジタルコンテンツ教材があったことを知っていたか	知っていた	知らなかった			
	26(81.3%)	6 (18.7%)			
これまでに家庭科のデジタルコンテンツ教材を見たり、使ったりしたことはあったか	実際に使ったことがある	見たことはあるが、使ったことはない	見たことも使ったこともない		
	7 (21.9%)	16 (50.0%)	9 (28.1 %)		
今日のような学習アプリを使ったことはあったか	他の授業で使ったことがある	教育実習など学校現場で使ったことがある	あることは知っていたが使ったことはない	あることも知らなかった	児童・生徒として使ったことがある
	4 (12.5%)	6 (18.7%)	23 (71.9%)	1 (3.1%)	1 (3.1%)

3.2 家庭科学習におけるデジタルコンテンツを使うことへの意識

表2を見ると、「自分がもし授業をすることになれば、積極的にデジタルコンテンツを使ってみたいか」の問いに対して「使ってみたい」という回答が圧倒的に多く、小学校と中学校の校種には差が見られない。学生には授業づくりの経験が少ない分、発達段階による児童生徒の反応などはイメージできにくいことから、教材の適時性については判断が難しいともいえる。しかし、積極的に取り入れてみたい理由として、学習者の立場から「学習意欲の喚起」「体験することの価値」「対話的な学習の保障」など、デジタルコンテンツを使うメリットとして本質的なことを理解できていることもわかった。また「指導者として活用した授業がしてみたい」、あるいは「学習評価がしやすい」など期待感をもっていることもわかった。デジタルコンテンツを使いこなす授業づくりについての不安も見られたが、不安ではあるが使ってみようと思っているという点に注目すべきであろう。講義の中でも、実際にデジタルコンテンツを使ったのちに、意見や考えを交流する場面を設定したことから、個別にコンテンツで学習するだけでなく、対話的場面を設定すれば話し合いが活発になることも実感できたのではないと思われる。

3.3 家庭科学習における学習アプリケーションを使うことへの意識

表3を見ると、デジタルコンテンツと同様に、学習者のメリットとして「学習意欲の喚起」や「対話的な学

習の保障」などをあげている。指導者として積極的にICTを使いたいという気持ちや学習評価のしやすさについても期待感を持っている。ここでもやはり使った経験も少ないことから多くの学生は不安を持っているにもかかわらず、積極的に取り入れた授業づくりがしたいと考えていることに着目すべきである。

本講義の時間では実際に一人一台タブレット端末によって個人のアカウントを用いてロイロノートに入る設定をしておいた。時間の関係で、課題を提出ボックスに入れて共有するところまで実際にはできなかったが、という機能を使ってどのような展開ができるかという説明を受けたので、授業展開のイメージが持てた学生も多かったのではないかと考えている。また、学習効果についても期待感があり、単に学習が楽しくなるだけでなく、学習内容の定着や課題解決力等の育成といった学習効果にもつながると実感したと考えられる。

3.4 自由記述による感想や質問等から見えること

受講後、本授業の内容を受けて、使用したコンテンツや学習アプリケーションについての感想や質問、講義全体から自分が学校現場で授業を行うことを想定したときに準備しておきたいことや、不安や疑問に思っていることなどを自由記述で回答させた。調査対象者32名中29名から自由記述の回答が得られた(表5)。

複数の内容を記述している場合も含み、記述内容を授業づくりや授業改善に対する意識に関連の浅いと思われるものから深いと思われるものを表4のようにA～Gに順に7つのカテゴリーに分類した。

表2 家庭科学習におけるデジタルコンテンツを使うことへの意識に関する質問と回答

設問	回答結果					
自分がもし小学校で授業をすることになれば積極的にデジタルコンテンツを使ってみようと思うか	とてもそう思う	できれば使ってみようと思う	できれば使いたくない	絶対使いたくない		
	26 (81.3%)	6 (18.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		
使いたいと思う理由は？(複数回答可)	意欲的に取り組めようと思うから	自分もICTを活用して授業をしてみたい	子どもにとってはシミュレーションでも体験する価値があるから	学習の評価がしやすいから	話し合い活動が盛り上がるから	その他
	30 (93.8%)	13 (40.6%)	27 (80.4%)	4 (12.5%)	11 (30.4%)	0 (0.0%)
使いたくない理由あるいは使いづらいと思う理由は？(複数回答可)	意欲的に取り組めようとは思わないから	ICTを使った授業に不安があるから	シミュレーションでは体験にならないと思うから	学習の評価がしにくいから	話し合い活動が盛り上がらないから	
	0 (0.0%)	9 (28.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.1%)	
自分がもし中学校で授業をすることになれば積極的にデジタルコンテンツを使ってみようと思うか	とてもそう思う	できれば使ってみようと思う	できれば使いたくない	絶対使いたくない		
	20 (62.5%)	12 (37.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		
使いたいと思う理由は？(複数回答可)	意欲的に取り組めようと思うから	自分もICTを活用して授業をしてみたい	子どもにとってはシミュレーションでも体験する価値があるから	学習の評価がしやすいから	話し合い活動が盛り上がるから	その他
	22 (68.8%)	9 (28.1%)	22 (68.8%)	14 (43.8%)	14 (43.8%)	0 (0.0%)
使いたくない理由あるいは使いづらいと思う理由は？(複数回答可)	意欲的に取り組めようとは思わないから	ICTを使った授業に不安があるから	シミュレーションでは体験にならないと思うから	学習の評価がしにくいから	話し合い活動が盛り上がらないから	
	0 (0.0%)	9 (28.1%)	0 (0.0%)	1 (3.1%)	0 (0.0%)	

初めてコンテンツや学習アプリケーションを使う授業を体験したことを通して、まず興味・関心を持ち意欲的に学習する姿がうかがえた (A)。

さらにコンテンツやアプリケーションそのものへの興味・関心にとどまらず、それをどのように活用すれば良いのか活用の仕方や授業づくりの課題を見い出していることもわかった (B)。

また、子どもが小学校第5学年までに使いこなしておくことの重要性とともに、授業する指導者自身が自信をもってそれを使いこなせるようにしておかないといけないという使命や責任にも気づいていた (C・D)。教員養成課程の学生にとって大変重要な気づきである。

また、指導内容によっていろいろなコンテンツを使い分けることや、学習への見通しを持たせ、自分の生活や経験と結びつけて学ぶことが重要であることなど、教科の本質にかかわる点と結びつけて ICT の活用に言及している回答も見られた (E)。また家庭科に限らず、アクティブラーニングを意識して、主体的に児童生徒が学習をすすめるイメージが描きにくかったが、デジタルコンテンツや学習アプリケーションを活用することによって、それが可能になることにも気づいている回答も見られた (F)。

そのほかコンテンツの改善点についても「レベルに合

わせて取り組めるようにレパートリーを豊富にすべき」や「中学生対象のものをつくるか選択肢をもっと増やして難易度を高くする」「高等学校でも用いることができる使い方ができるとよい」「選んだ理由や過程を自由記述させるものがあったとよい」など発展的な扱いに言及している回答も見られた (G)。

このようにデジタルコンテンツのよさも見つけながら、家庭科本来のもつ学習の意義や、家庭生活への実践化にもつながる感想も見受けられた。教科の本質を落とさずに教科指導のあり方を考えていくためにも大切な視点であるといえる。学習アプリやデジタルコンテンツによって個別最適化がメリットとして働く場合もあるが、個別学習に終始するのではなく、対話的な活動場面によってこそ思考が働き、それをファシリテートする教師の力量が問われることにも気づいている。授業の構想や実際の教壇に立ったときに必要な身に付けておくべき指導力のイメージをもつきっかけづくりにもつながると期待される。

教科教育は教科内容の背景となる知識や理論はもとより学習指導法の基礎基本を伝えていくだけでなく、これからの新しい授業のあり方、学習のあり方が問われている。だからこそ、教材内容論や教科教育法のあり方もまた変容していかなければならないといえる。

表 3 家庭科学習における学習アプリケーションを使うことへの意識に関する質問と回答

設問	回答結果					
自分がもし小学校で授業をすることになれば積極的に学習アプリを使ってみたいと思うか	とてもそう思う	できれば使ってみたいと思う	できれば使いたくない	絶対使いたくない		
	16 (50.0%)	16 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		
使いたいと思う理由は？ (複数回答可)	意欲的に取り組めると思うから	話し合いが盛り上がるから	学習効果が上がると思うから	学習の評価がしやすいから	自分もICTを使って授業をしてみたいから	その他
	30 (93.8%)	13 (40.6%)	29 (90.6%)	5 (15.6%)	12 (37.5%)	0 (0.0%)
使いたくない理由あるいは使いづらいと思う理由は？ (複数回答可)	意欲的に取り組めるとは思わないから	話し合い活動が盛り上がり上るとは思わないから	学習効果が上がるとは思わないから	学習の評価がしにくいから	ICTを使った授業に不安があるから	
	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	10 (31.3%)	
自分がもし中学校で授業をすることになれば積極的に学習アプリを使ってみたいと思うか	とてもそう思う	できれば使ってみたいと思う	できれば使いたくない	絶対使いたくない		
	19 (59.4%)	13 (40.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		
使いたいと思う理由は？ (複数回答可)	意欲的に取り組めると思うから	話し合いが盛り上がるから	学習効果が上がると思うから	学習の評価がしやすいから	自分もICTを使って授業をしてみたいから	その他
	26 (81.3%)	15 (46.9%)	23 (71.9%)	14 (43.8%)	13 (40.6%)	0 (0.0%)
使いたくない理由あるいは使いづらいと思う理由は？ (複数回答可)	意欲的に取り組めるとは思わないから	話し合い活動が盛り上がり上るとは思わないから	学習効果が上がるとは思わないから	学習の評価がしにくいから	ICTを使った授業に不安があるから	
	1 (3.1%)	2 (6.2%)	1 (3.1%)	1 (3.1%)	10 (31.2%)	

表 4 自由記述内容と回答の分類

A	B	C	D	E	F	G
興味関心	課題発見	活用経験の重要性 (児童)	活用経験の重要性 (指導者)	教科の本質との関連	主体的な授業づくりとの関連	教材の改善点
9	13	1	11	12	12	4

教員養成課程における学生の ICT を活用した授業への意識についての一考察

表 5 自由記述による回答内容の分類

自由記述の内容	回答内容の分類
今回の授業は1つの端末で完結することのできるともいい教材だと感じた。また、様々な人のニーズに合わせた買い物を考えることで、様々な目的に応じた買い物についての見方、考え方を身につけられるのではないかと感じた。。とても楽しい授業だった。	AB
今回の授業とは少し離れるかもしれないが、見方・考え方をどのように子どもたちに身につけさせるのか知りたい。	B
デジタルコンテンツはとても使いたいと思った。行けなくても、できなくても、画面の中で自分でさわりながら体験できるのは、コロナ以降とても重要なものになったと思う。ただ、5年生になるまでにロイロノートやデジタルコンテンツの扱いを子どもたちにも教え、使えるようにしておかないといけないのは大変だとも感じた。まず教員が完璧にしておく必要があるので、準備しておこうと思う。	ACD
今回の授業を受けて、家庭科は子どもたちの好きな楽しい教科で生活と深く根付いていると改めて感じた。家庭科は語句を覚えるなどの暗記ではなく、授業での学びをどう実践していくかを考えることが大切であると知った。今回、新たにデジタルコンテンツ教材というものを知ることができ、実際に体験できなくても体験しているかのような感覚を味わえるとともに子どもたちの興味も惹きつけられるとても良いものであると思った。私はICTの活用に苦手意識を持っているため、さまざまなものに触れていきたいと思った。	DE
ロイロノート等は有名であるが、そのほかにも地域ごとに開発している様々な教材があると知ることができた。電子機器に自信がないため、今はうまく使いこなせないと思うが、使えると活動や学びの幅がひろがるため、積極的に取り入れたいと思う。	D
私はロイロノートを使って授業をしたことがなかったため、ロイロノートを用いた具体的な進め方を学ぶことができてよかった。自分より子どもたちの方がタブレットを使いこなせていると思うため、自分が教壇に立つことになったらしっかり勉強をしておきたいと考えた。	D
デジタルコンテンツの利用により、どの程度子どもの学習過程や結果に違いが生まれたのか気になった。デジタルコンテンツの利用に際して教員はその利用が目的にならず、サポート材料となることを目指すが、実際には十分にできているのか。	BDG
買い物をする経験を授業の中でできないと思っていたことが、ICTの活用になりそれが可能になったことが家庭教育の発展に大きくつながると思った。是非、授業の中で利用できるようにデジタル教材について調べようと思った。	BDG
意外と買い物をしたことがない小学生がいることに驚いた。目的に合わせて買う商品を比較して選んだり、時には買わない選択をしたりなど、子どもたちが自分の生活に活かせるようになっていのがとても魅力的であると感じた。また、VRでは子どもたちの住んでいる地域に関わらず、体験的な学びが得られるところに良さを感じた。また、学んだことからポスターを作成したり、自分の住まい方の工夫を考えたりなど、アウトプットの活動も合わせて行う必要があることを学んだ。	ABE
今回の学習指導要領の改訂では、家庭や地域での実践が重視されている。今回の講義でも、地域の人の協力が挙げられていたが、実際に協力するに当たっては非常に難しいと思う。協力する具体的な方法について教えて頂きたい。	BE
ICTを使った授業はデジタル教科書の経験しなく、ロイロノートなどは使ったことがなかった。ただ、今回の講義で様々なデジタルコンテンツを知り、今の生徒は色々な方法で学ぶことができるのだと分かった。教材に合わせて使用するデジタルコンテンツを変える工夫が大事だと感じた。	BDE
家庭科の魅力は自分の生活で活かすことができるようになることだとおっしゃっていて、自分がこれから行っていく授業づくりの幹となる部分に気付くことができた。今の社会に必要なことや、社会で起きている問題、求められている資質能力について常に把握しながら社会の宴容にあった授業を行っていきたいと思った。	BE
デジタルコンテンツを用いた授業はとても面白かった。子どもに体験を通して考えさせることの大切さを実感した。	AF
2つのデジタルコンテンツに実際に取り組んでみて、日常生活と繋げ、自分のこととして考えられる教材づくりが大切だと改めて感じた。私自身も生徒が本物の体験をできる授業を意識して行っていきたい。	EF
京都の家屋を見れるコンテンツに興味を惹かれた。実際には体験しづらいことも、体験して自分ごととして考えることができるICT活用は、非常に良いなと思った。保育現場でもICT活用が進んでいるため、もう少し簡単なものだと思うが、活用の仕方を考えてみたい。	ABF
授業をする上で、大切にすべきことを改めて学ぶことが出来た。また、ICTの具体的な活用法を知ることが出来た。これまで生活に関連させて学習していくことは大切だと学んでいたが、さらに具体的にどんな風にどんな事を学ばせるのかを学ぶことが出来た。特に、題材の入り口で、何でこの学習が必要なのか、こういう理由があって学習する必要があると生徒に知らせ、題材や授業の最後に家庭や生活の中で実践することが大切と学び、今後の授業づくりに生かしたいと思った。	BF
生徒が自分ごととして学習できる授業を目指して指導案や模擬授業をつくろうとは思っているが、教科書をみると教科書よりの授業になってしまっって何を伝えたいのかがわからなくなることがあった。今回の授業でICTを活用することによって自分ごととして学習しやすいと感じた。	BEF
アクティブラーニングと言われるご時世で、家庭科の授業においても、話し合い活動を取り入れなければならないという固定観念にとらわれていたので、話し合い活動を行う真の意味がわからずにモヤモヤしていたが、本日の講義にて根拠を考えさせる事が大事である事を学び、話し合い活動を生徒にさせる場合、もっと発問や授業実践を子どものニーズに合わせなければ考えなければならないと自分の至らない点に気づく事ができた。	BEF
今回、デジタルコンテンツを使ってみて、子どもが楽しく学べると思った。ICTはあまり使ったことがなく、不安だったが、調べてみると様々なコンテンツがあらとわかり、活用してみたいと思った。	ADF
授業を受けて、デジタルコンテンツでの買い物は買い物をしたことがない生徒でも分かりやすく買い物の疑似体験ができるためとても良いなと感じた。今回はエコバックを選ぶデジタルコンテンツだったが、デジタルコンテンツを選ぶ上でどのような点に考慮しながら選ぶのか、知りたくなった。また今回はロイロノートを使用できなかったのですが、私はロイロノートをまだ使用したことがなく、使い方も分からないため、ロイロノートについてもっと知りたいと感じた。	ADF
題材の入口で生活との繋がりを持たせるというのがとても参考になった。適したデジタルコンテンツを上手く見つけ、活用出来る術を身につけたいと感じた。	ADF
今回の講義を通して、デジタルコンテンツを用いた授業の実践について学ぶことができ、勉強になった。授業を行うにあたり、学習の見通しを持たせ、生活や体験と結びつけることが重要であるとわかり、学習内容への理解を深めたり、教材研究を行う中で、授業の展開について考えていきたいと考える。今回はロイロノートを使用することができたため、ロイロノートの効果的な活用方法についてももっと知りたいと思った。	DEF
住生活の授業において、体験的な授業の実施が難しいこと、比較実験をするための測定機器（照度計や騒音計など）が揃っていない学校もあり、実施がほとんどなされていないことから、測定機器の代替として、タブレットの環境測定アプリを使って実験的・体験的な授業ができないか、ということ調べていた。なので、本日の講義は大変興味深かった。私はアプリに焦点を絞って研究していたので、今回の授業のようなデジタルコンテンツがあることには驚きだった。もっと家庭科には使えるツールがある、もっと住生活でも体験的な授業ができる、と可能性を感じた。来年からは小学校教師として働くが、先生のおっしゃるようにコミュニティをもっと広げて、教育に活かせることを吸収していきたいと思う。	AEFG
以前高校の授業を見学に行った時ロイロノートを課題の提出場所にしていて、もっと発表に使用したら盛り上がるなと感じていた。今日の講義でICTの使用仕方での授業がもっと効率的になり、わかりやすいものになると感じた。	FG
京町家のVRは、先生の話聞いて、できれば肌で感じられるように本物の町家に行くことが出来た方が良かったと思った。涼しさだけでなく、心地良さは実際にその空間に入ってこそ感じられるものであると思った。近くに町家がない場合には十分であるが、目的をしっかりと伝えないとただ遊ぶだけの児童生徒が出てくるといった。	BFG

4. 今後の課題と展望

今回、中等家庭科教育法の特別講義という形で、現在の学校現場の現状に沿ったデジタルコンテンツの体験や学習アプリケーションを使った授業展開を学生に体験させ、調査を行った結果から明らかになったことをまとめる。

まず実態として、教育のデジタル化についてはそれなりに情報を持っており、デジタルコンテンツや学習アプリケーションの存在については知っている学生が多かった。しかし、実際にそれらを使った授業は学生自身の学習履歴としても経験が豊かとはいえず、実際に授業参観する機会も少ないのが現状であることが明らかになった。

次に、今回実際にデジタルコンテンツ教材を使ってみたことでほとんどの学生が興味関心を持つ傾向が見られた。また学生の意識としては、授業の中で指導者としての ICT を使いこなすことへの不安は大きいものの、指導方法としての有効性や指導者にとって効果的な方法であるということにも気づいていた。それは、これまで教職課程の中で得た、効果的な学習方法のあり方や、児童生徒の関心意欲の持たせ方など履修した学修内容と関連させて考えているからであると言える。また自分が教育実習や学校現場に出て実際に授業を考える場合に、ICT を活用してみたいという意欲や期待感が大きいことも明らかになった。

これらのことから、今後の教科教育法の内容にも、主体的に学生が ICT を活用した指導方法や授業展開についての学習の機会を保障していくことや、履修内容の充実が求められているといえる。

一方、今回の受講生の学年ごとの集計結果からは、1 回生から 4 回生までの系統的な学修内容を考えておくことの必要性が示唆された。今回のように指導者が用意したコンテンツや学習アプリケーションを経験し、学校現場で求められる ICT 活用能力について知ったからといって、すぐに学校現場で自ら教材を創り出したり、授業展開を考えたりできるわけではない。しかし、実際に ICT を活用した教材の工夫や指導法に触れる事例を体験的に学ぶようなプログラムも重要であると考ええる。

今後は、系統的に、まずは体験してみること、学生自身が自分でコンテンツやアプリケーションについての情報を収集すること、自ら ICT を活用した授業づくりを立案すること、実際に ICT を使った授業実践を行ってみること、実践をもとにした省察と改善をはかること、といった一連の学習を教科教育法の学習としてデザインしていく必要があると考える。

これらのことを実現するためには、講座全体で教員がチームとしてシラバスを見直し、履修科目の内容と教育実習の経験を見通して体系化をはかることが課題となっていくであろう。また、学生同士が卒業生を含めて縦につながり学校現場と連携していくことも、これからの教員養成の視点として重要なポイントではないかと考えている。そのためのシステムの構築もまた今後検討の余地がある。

以上のことから本研究では、現代の学校現場に求められている課題について学生自身が自信をもって教壇に立つことができる教科教育法のあり方を考えるための重要な示唆を得られるものであった。

(追記)

本論文は、2022 年度の中家庭科教育法特別講義を受けてもらった滋賀大学教育学部家政教育講座の 2 回生、3 回生、4 回生、教職大学院の院生にご協力いただきました。学生・院生のみなさんに感謝申し上げます。

引用・参考文献

- ¹ 国立教育政策研究所、令和 4 年度全国学力・学習状況報告書〈質問紙調査〉 pp88-94, 2022
- ² 国立教育政策研究所「教員養成課程における ICT 活用指導力の育成のための調査研究 (H28- H29 報告書の概要) p2, 2018. 12
- ³ 加藤佐千子他「ICT を活用した家庭科教育の現状 2016-2020 の文献分析を通して」『福祉生活デザイン研究』第 4 号 pp1-12, 京都ノートルダム女子大学, 2021
- ⁴ 国立教育政策研究所「教員養成課程における ICT 活用指導力の育成のための調査研究 (H28-H29 報告書の概要) p3, 2018. 12
- ⁵ 京都市小学校家庭科教育研究会, 京都消費生活総合センター, 京都市教育委員会監修デジタルコンテンツ教材『買い物について考えようエコバッグがほしい』<https://kyoto-soudan.jp/material/ecobag/> 2023. 11. 17 閲覧
- ⁶ 京都市小学校家庭科教育研究会, 京都市教育委員会, 特定非営利法人京町家再生研究会監修『京町家 VR 体験システム』<https://kyomachiya-edu.com/> 2023. 11. 17 閲覧